

人と自然の アートで輝く「宝の島」

〜**甌島**が描く交流による未来のデザイン〜

「KOSHIKI ART PROJECT」が、全国自治体フェアでグランプリを受賞した。故郷を愛する若者たちの行動力と創造力を起爆剤として、地域の活性化に取り組み甌島と、それを応援する薩摩川内市の活動にスポットを当てる。



■甌島列島

川内川河口の西方、東シナ海上約26kmのところの上甌島・中甌島・下甌島の3島と無人の小島が連なる。全長約35km、面積約119km²、人口約5,800人(平成22年2月現在)。串木野新港からフェリーで最速70分、高速船で最速50分。

豪壮な海食崖、特異な湖沼群、鹿の子百合の原生地、緑豊かな常緑広葉樹原生林と、他では見られない自然景観に恵まれている。また、キビナゴ魚を中心とした漁業の盛んな島で、新鮮な魚介類も豊富。

気候は温暖で、年平均気温は17.5℃、年間降水量は約2,500mm。台風銀座といわれるほどの台風の通り道でもある。

平成16年10月、里村(上甌島東部)、上甌村(上甌島西部と中甌島)、下甌村(下甌島中南部)、鹿島村(下甌島北部)の甌島4村と本土の1市4町が合併し、薩摩川内市となった。

※以下、旧里村→里町、旧上甌村→上甌町、旧下甌村→下甌町、旧鹿島村→鹿島町と表記

概要

若者たちによるアートを核にしたユニークな交流プロジェクトが、昨年、自治体総合フェア二〇〇九「第一回活力協働まちづくり推進団体表彰」でグランプリに輝いた。近年、甌島、そして薩摩川内市では観光振興に積極的に取り組みつつあったが、この出来事をきっかけに、さらなる動きを見せようとしている。何がこのムーブメントの原動力となったのか。市が「宝の島」と呼ぶ甌島の魅力とは何か。そして島と市は、どんな十年、二十年後の未来図を描いているのだろうか。

若い創造力が島民を刺激

本土から離れた素朴な甌島で強引に開催し、続けてきたアートによるプロジェクト。島にやってきた若いアーティストたちと、地元の住民たちが受けた刺激とは。島の中で何が変わり、どんな動きが出てきたのか。

観光を軸に島全体の活性化を

主力産業である漁業も将来に不安を抱え、観光業との連携に活路を求める。甌島にはどんな地域資源があるのか。観光業に期待される真の役割とは何か。そして、どんな観光交流を目指し、そのためにはどんな準備が必要なのか。

市も積極的にバックアップ

九州新幹線の全線開通を来年三月にひかえ、観光事業の振興に力を入れている薩摩川内市。観光において甌島はどう位置づけられているのか。市はどんな活動を始めているのか。甌島をどうバックアップしようとしているのか。

「甌島で、つくる。」KOSHIKI ART PROJECTとは

「甌島で、つくる。」をスローガンに、平成16年からスタートしたアートを核とする地域活性化プロジェクト。その目的は、島外のアーティストとの交流を手段として、甌島に伝わる文化・暮らし・自然の豊かさなど、「甌島にあるもの」の素晴らしさを島民たちに見直してもらうきっかけを創ること。また同時に、島外の人に甌島の魅力を伝えていくことにある。社団法人日本経営協会が主催する自治体総合フェア2009において「第一回活力協働まちづくり推進団体表彰」最優秀プロジェクトに選ばれた。里町一帯を開催地とし、昨年からは上甌町も加わった。次の4つのプロジェクトから成り立っている。

① KOSHIKI ART EXHIBITION

代表の平嶺林太郎さんがセレクトした若手アーティストが、毎年8月の1か月間島内の空き家に滞在し、創作活動を行う。出来上がった作品は、8月最終週の1週間、空き地・空き家・空き倉庫などを使って展示される。

② じょうやま音楽祭

甌島に伝わる伝統芸能や島唄を復活させることを目的に、平成20年から開催された。里町の亀城跡地を会場に、島で活動する団体や伝統を守る保存会、島外のアーティストが「甌島」をキーワードに歌と演奏を披露する。

③ たまいしプロジェクト

※9ページで紹介

④ 甌 MOYAI 塾

「島の文化は日々の暮らしから生まれる」をキーワードに、地域住民を対象として昨年からは開催された塾。様々な分野の外部講師を招き、テーマごとに講師・学生・地域住民が一緒になって甌島の価値を見出し、可能性を探る。



事務所兼創作場所



じょうやま音楽祭。甌島の伝統芸能や島外の島唄などが披露される。鹿児島市でプロジェクトのPRをしている「KOSHIKI応援隊」のメンバーも奏者として参加する。写真は里町の伝統芸能で、初盆の家の慰霊や雨乞いの際に踊られる「さつこら踊り」。

子供たちとのワークショップ。スタッフ、アーティスト、島の子供たちが協力してアートを創作する。

アートは島のいたるところに展示される。写真は、相川啓太さんの作品「一筆描きのホシ」(平成20年)。

甌島で、つくる。KOSHIKI ART PROJECT 公式ブログ ▶ <http://koshikiart.chesuto.jp/>

CHAPTER 1 若い創造力が島民を刺激

とにかくやってみる
そこから変わっていく

きっかけの一つは、平成十五年の秋に新潟県で見た「大地の芸術祭」だった。上甕島・里村(当時)出身の平嶺林太郎さんは当時、東京造形大学で油絵を専攻する学生。いわゆる「箱もの」の展示会場ではなく、地域の各所でアートを展示するこの芸術祭を見て強い衝撃を受けた。折しも甕島は、翌年に市町村合併を控え、平嶺さんの故郷である里村は無くなることになっていった。「村」を何らかの形で刻みつけたいと考えていた平



KOSHIKI ART PROJECT 副代表
やました けんた
山下 賢太 さん

KOSHIKI ART PROJECT 広報/
薩摩川内市観光協会 甕島案内所
ひらかね しゅんこ
平嶺 純子 さん

嶺さんはこの時「KOSHIKI ART PROJECT(以下、アートプロジェクト)」の開催を思いついたのである。翌平成十六年、村最後の成人式で成人代表としてスピーチした彼は、地元でアートプロジェクトを開催することを公に宣言した。「突然のことに家族は反対しましたが、お構いなしに展示場を使う空き家を見つけ、夏には十五人の美術仲間を連れてきてしまいました」と語るのは、林太郎さんの姉であり、現在、甕島観光案内所に勤める平嶺純子さん。彼女はアートプロジェクトの広報担当でもある。

そして八月、第一回のアートプロジェクトを強行開催したのである。しかし、地元住民はもとより、イベントを手伝った家族や空家を提供してくれた人さえ、その意義や目的を理解していなかった。翌年には第二回を開催したが、やはり住民の目には若者たちが何やらワイワイやっているとしか映らなかつた。一部では「若者が騒ぎ過ぎてうるさい」とか、「子供たちに悪い影響を与えるのではないか」という声も聞かれたが、それでも林太郎さんは試行錯誤しつつも毎年の開催を続行したのだ。

住民もアーティストも強い影響を受ける

そんな中でちょっとした転機になったのが、スペイン・バルセロナ大学の学生が参加した平成二十年・第五回の時だ。海外からの参加者を迎え、マスコミに大きく取り上げられたことで、一気に住民たちの認知度も上がった。

「地元の人にとって、アートは自分たちの生活に無縁のものだったと思います。でも、毎年続けていくうちに、今年はいつ来るのとか、若い人が歩いているだけでうれしいといった『待ち望む声』も聞かれるようになった」と純子さん。

また、アーティストが海岸の清掃活動や盆踊りなどに参加し、住民とのふれあいも増した。当時を振り返り、アートプロジェクト副代表の山下賢太さん(里町出身)は語る。



草やワラ、玉石など「甕島にあるもの」でアートを創りあげる。時には家や風景までもが作品の材料になる。



倉庫の内壁をキャンバスに見立てて甕島を描いた「home-home」。青木真莉子さんの作品(平成21年)。

「屋外で紐を結びながら作品を創作している者がいたのですが、漁師が通りかかって紐の結び方を教えてくれたというのです。いわば紐結びのプロから思わぬ助言をもらい、これが『甕島で、つくる。』ということなのだと感じていました。アーティストにとっては、便利で慣れた創作環境を離れ、ありのままの自然の中に身を置くことで創作の原点に立ち返ることができる。住民にとっては都会の若者たちとのふれあいから、島の魅力を改めて見直すきっかけとなる。アートプロジェクトが目指すものの輪郭が、だんだんと浮かび上がってきたのだ。

「島での創作が刺激となって、都会に帰ってから才能が爆発するアーティストもいます。住民側も自宅の倉庫の壁を絵画のキャンバスとして提供するなど、協力してくれる人が増えてきました」と山下さんは語る。

全国グランプリを受賞 活動も夢せふくらむ

そして昨年、アートプロジェクトは地域活性化への貢献が認められ、全国自治体フェア二〇〇九「第一回活力協働まちづくり推進団体表彰」で全国グランプリを受賞した。この栄誉は島全体や市からの注目度をぐんと高めるとともに、住民の理解や意識も向上させ、里町商工会の青年部を中心に各産業の代表者が結集した「里地域活性化委員会」の発足にもつながったのである。

「たまいしプロジェクト」

上甕島・里町に古くから伝わる玉石の石垣を復活させようと、アートプロジェクト副代表の山下賢太さんが中心となり平成20年からスタートした活動。

「昔ながらの風景や物は、そこに住む人々を結びつける力を持つ」との考えから、道路の拡張工事などで失われた玉石垣の再現に取り組み、山下さんの後輩である京都造形芸術大学の学生、地元の高校生、住民らで町の各所に新しく玉石垣を積み上げている。

修復された玉石垣を含む里町の玉石垣は、平成21年4月、国土交通省が認定する「島の宝100景」に選出された。



玉石垣を積み様子



修復された玉石垣

「甕島で、つくる。」というスローガンは、「甕島を、つくる。」という意味だったので、と青年部の人に言われました。島を愛し、島の未来を見つめる私たちの活動を理解してくれたのがうれしかった」と、純子さんは語る。

昨年からアートプロジェクトの開催地は、里町から上甕島にまで広がり、展示会の入場者は前年度の倍になる約六百人(うち約二百人は島外者)を数え、初めて下甕島からも来場者があった。平成二十年には、「じょうやま音楽祭」と「たまいしプロジェクト」、昨年からは「甕MOY AI塾」も加わり、アートプロジェクトは確実に力強い前進を続けている。純子さんは、これまでの成果をこう語る。

「地元の大人たちが理解・協力してくれるようになったとともに、アートプロジェクトを身近に見て、島のために何かしたいという子供が増えてきたことも成果のひとつです。また、伝承者がいなくなるギリギリで八十年ぶりに伝統の盆踊りが復活したことなど、眠っていた島の文化を掘り起こすこともできました。これからも、島のために何ができるかを探していきたいですね」

CHAPTER 2 観光を軸に島全体の活性化を

水揚げ量日本一のキビナゴをブランド化したい

アートプロジェクトから刺激を受け、「自分たちも島のために何かをしなければと思った」と語るのは、里地域活性化委員会の委員長で、ご自身が漁師でもある日笠山誠さんだ。「島は漁場に恵まれています。近年では魚の価格自体が下がり、そのうえ船などの燃料価格も上がっています。今から行動を起こさなければ漁業はますます苦しくなります」

甕島の主力産業は漁業。上甕島ではキビナゴ漁、下甕島ではバシヨウカジキ(アキタロウ)漁が盛んで、他にもメジナ、ブリ、アジ、サバ、イカなど種類も漁獲量も豊富だ。とくにキビナゴは一年を通して漁獲され、実質の水揚げ量日本一を誇る。



里地域活性化委員会 委員長
ひがきやま まこと
日笠山水産 代表 日笠山 誠 さん

五、六月の子持ち時期と、脂ののった冬場のものが人気で、刺身・焼魚・煮付け・天ぷら・鍋しゃぶなど多彩な料理がある。

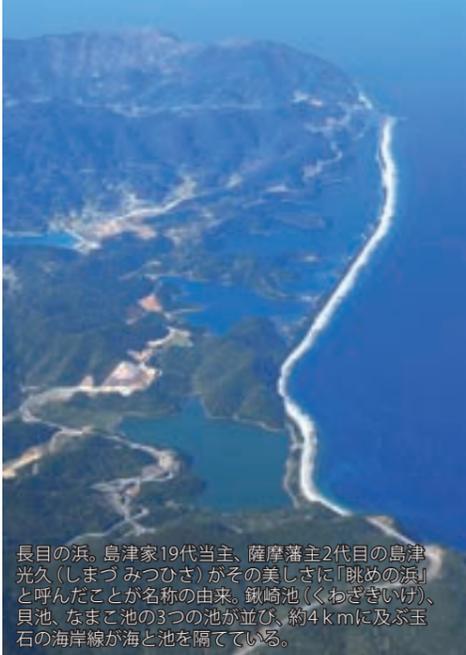
この島の宝ともいえるキビナゴを守るために、甕島四町で漁師たちが資源管理協議会を作り、小さいものを獲りすぎないように網の目の大きさを制限したり、休漁日・操業時間・保護区域での漁禁止などの取り決めをしている。

また、公的助成金である「離島漁業再生支援交付金」を利用してキビナゴをPRするパンフレットを作成し、県内の物産展に出展している。しかし、島には魚市場がない。水揚げした市場で産地表示されるので、一般的に「甕島産」と表示できないのだ。

「これからは島で獲れたキビナゴを島から出さずに、食品加工などをして『甕島産キビナゴ』をブランド化していきたい。加工工場ができれば雇用の創出にもなる。また、観光業などの産業と連携して、新しい漁業のかたちを作っていきたい」と日笠山さんは熱く語る。



キビナゴの刺し網漁の様子。キビナゴは明るいと獲りにくいので、深夜に漁を行う。



長目の浜。島津家19代当主、薩摩藩主2代目の島津光久（しまつ みつひさ）がその美しさに「眺めの浜」と呼んだことが名称の由来。鏡崎池（くわぎきいけ）、貝池、なまこ池の3つの池が並び、約4 kmに及ぶ玉石の海岸線が海と池を隔てている。



甌島はスキューバダイビングの穴場。東シナ海の海流の影響により、南西諸島とは違う「甌ならではの」海の風景が楽しめる。

独特の自然美と文化 ユニークな魅力あふれる甌島

甌島には美しい自然はもちろん、全国的にも珍しい地形や文化的な遺跡が数多くある。海岸流で運ばれた海底の砂礫が水面上に現れた「トンボロ（陸繋砂州）」、海と三つの池を隔てて伸びる長さ四キロメートルの玉石の道「長目の浜」、数多くの奇岩が連なる「鹿島断崖」、フランス皇帝ナポレオンの姿に似た「ナポレオン岩」などのビュースポット。亀城跡、武家屋敷跡、キリシタン殉教地などの史跡。夏には甌島が原産の鹿の子



薩摩川内市観光協会 事務局次長
甌島案内所長 純浦嘉孝 さん

「漁業は不安定な要素が多く、これまで盛んだった建設事業も、従来の基盤整備事業はだんだんと少なくなってきました。今後は、結びつく産業の裾野が広い観光業を軸に、島全体の活性化を図っていく必要があると思っています」と語るのは、薩摩川内市観光協会・甌島案内所長の純浦嘉孝さん。
産業面においては、キビナゴ漁など従来の漁業に加え、新しい産業として、マグロの養殖や海洋深層水を利用した飲料水の販売なども進められており、これらも観光業との結びつきにより、さらに進展する可能性を秘めている。

各町が協力し合って 甌島らしさを発信する

上甌島と中甌島は橋で結ばれているが、下甌島へは橋がなく、定期船を利用しなくてはならない。この不便さを解決するため架橋工事が進められており、十年後には完成する予定だ。

「橋で結ばれば、島にある四町の連帯感もさらに高まるでしょう。その前に基盤となる里地域活性化委員会のような組織を、若い人たちを中心に各町で誕生させたい。そして、観光を基軸として甌島地域の活力を生み出していきたいと思っています。アートプロジェクトも活性化委員会も、活力ある島にしたいという目標は同じだと思っています。お互いの得意なところを活かし合えばいい」と純浦さんは語る。

観光交流事業のために、今後はNPO法人等が立ち上がると思いますが、ブルーツーリズムなど甌島方式の受入れシステムづくりが急務です。それらをコーディネートできたり、ツアーガイド、インストラクターなどの人材を島内で育てたいが、それにこだわらず外部からでも採用できればという。

また、島をPRするだけでなく、観光客の受け入れ体制を整えることも重要課題だと考えている。たとえばツーリズム企画の内容充実、食事をする場所や宿泊先、交通の整備、地元ガイド育成などである。市としては観光協会と連携して、ツーリズムやガイド養成の研修会を開催するなど、甌島の観光振興を積極的に応援していく方針だ。村岡さんは語る。

「本物」の交流を目指して 島らしさに心をこめる

「合併後五年が過ぎましたが、まだ効果は見えないかもしれません。でも、十年後、島のために『合併してよかった』と心から思ってもらえるように、今こそ取り組まなければならないと思います」
島を想う若い人たちが刺激を受け、島の未来づくりに真剣に取り組み始めた島民たちと、それを支える市…。夢をデザインして前進する、これからの甌島に注目したい。

市、観光協会、島民の連携で 活力ある未来づくりを

「甌島では、これまで四つの町がそれぞれ個々に観光をPRしてきました。しかし、これからは里町に設けた観光案内所を窓口にして、島全体をひとつに結ぶことが必要だと思っています」と村岡さん。それには市や観光協会、観光案内所のタテの連携とともに、島の住民とのヨコのつながりも大切だという。このタテとヨコの連携で組織が強化され、合併の本来の効果が現れるというのだ。



薩摩川内市 商工観光部 観光課
村岡 斎 哲 さん

薩摩川内市としても、甌島を本土の蘭牟田池と並ぶ観光の二本柱と位置づけている。本土の「グリーンツーリズム（山、川）」、甌島の「ブルーツーリズム（海）」という両輪で情報発信をしていく考えだ。
「外界離島との合併は稀なケース。他の市にはない島の魅力というものを活用していきたい。『宝の島』ともいえる甌島を輝かせることで、薩摩川内市も輝くと思います」と、薩摩川内市商工観光部観光課に勤める甌島出身の村岡斎哲さんは語る。
これまで甌島のPRはパンフレットに頼っていたが、昨年、市は魅力を映像で紹介するDVDを作成。これを旅行エージェントや新聞社など

下甌島の鹿島断崖付近では、ウミネコが子育てをする4～6月の間、生息地の近くに船を出し、クルージングしながら餌付けをする体験ができる。



トンボロ。海底の砂礫（されき）が海岸流で運ばれ、波の作用によって水面上に現れたもので、島と島をつなぎ、細長く低い地形をしている。里町の中心部はこの地形の上に集まっている。